

コメント

十島村口之島での上映会に感謝

Expressing Gratitude for the Toshima-mura Film Screening

日高 松行

HIDAKA Matsuyuki

1. はじめに

2010年3月23日(火)の現地上映会は、口之島に生きる島民に祖先との繋がりを思い起こし、口之島小・中学校の存続、口之島・十島村の興隆を誓い合った日である。

私は、この佳き機会に母校(十島村立口之島小・中学校)に校長として勤務させてもらっていた。前年に神奈川大学日本常民文化研究所を母体とする国際常民文化研究機構より「昭和9年の薩南十島調査の上映会を現地で行いたいのだが……。」との連絡をいただき、即答で現地上映をお願いした。それは、前年度から口之島小学校創立80周年の記念行事をいろいろ模索していたからである。

口之島小・中学校の喫緊課題は、学校存続であった。平成21(2009)年度は、地元の小学生2人、中学生1人、山海留学生3人の計6人。3年後には口之島小学校の休校が目前に迫る状況の中、私も島民も「学校を存続できなければ、かつて無人島になった臥蛇島のようになりかねない。」との思いがあった。

2. 十島村(じっとうそん・としまむら)

現在の^{としまむら}十島村有人島は、北から口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島の7島である(昭和45(1970)年7月28日、臥蛇島無人島)。南北約160kmにおよぶ日本一長い村である。

戦前は、現在の^{みしまむら}三島村(竹島、硫黄島、黒島)と^{としまむら}十島村で十島村(じっとうそん)であった。

ところが、1946年2月2日「連合軍総司令部」の命令「二・二宣言」で北緯30度以北の上3島(現在の^{みしまむら}三島村)と分離され軍政下に置かれた。^{としまむら}十島村が本土復帰したのは、1952年2月4日である。そして、2月10日から下7島は、^{としまむら}十島村、上3島は、^{みしまむら}三島村として発足したのである。

3. 戦後生まれの者

口之島が連合軍の占領下に置かれて密貿易基地の様子、終戦間際の空襲の様子、寺子屋教育、島民による「山伏慶元殺害」のことなどは伝え聞く。

私が生まれて5日後に本土復帰である。私自身、これまでの十島村のことや口之島について調べることはほとんどなかった。

戦後生まれの口之島の子どもたちは、全員が中学校卒業で島から旅立つのである。親たちは、大人になっても島に帰ってくることを望んでいなかった。

戦後の世代(昭和20~30年代生まれ)は、4歳~8歳(子守)、9歳~15歳(牛の草刈り、畑仕事、炊事、水汲み等)、親たち(自給自足の農作業、林道・港湾工事の砂利運び、出稼ぎ、機織り)で

あった。電気が灯ったのも昭和 30（1955）年後半（時間制限 1 日 2 時間程度）である。簡易水道が全戸に給水されるようになったのは、昭和 44（1969）年である。

昭和 41（1966）年度の口之島小・中学校の児童生徒数は、150 余人ほどであった。私の同級生は、23 人であった。ほとんどが中学校卒業後は、集団就職して働きながら夜間高等学校で学んだのであった。昼間の高等学校に進学したのは 4 人であった。それぞれ姉妹の支援を得ての進学である。集団就職した人は、自分で学費を捻出しながらも弟妹の学費を支援するのである。ところが、昭和 50 年代になるとほとんどが昼間の高等学校へ進学するようになる。この頃になると口之島にも現金収入の仕事が入ってきた。大島紬の機織り、林道・港湾工事である。

4. 『アチック写真 vol. 2』

国際常民文化研究機構からの現地上映会のことを伺った際の思いは、先に記述したとおりである。日本常民文化研究所の存在や昭和 9（1934）年に「薩南十島調査」が学術的に行われたことなど全く知らなかった。そのみならず、十島村の小学校令施行が本土と半世紀も遅れ、平成 22（2010）年 5 月 6 日で口之島小学校創立 80 年であることに気付いたのが 2 度目の口之島小・中学校赴任の平成 20（2008）年 4 月である。それから平成 7（1995）年 3 月発行の「十島村誌」をめくり、郷土史について少しずつ学ぶようにした。

平成 22 年度は、全ての学校行事を「創立 80 周年記念〇〇」と銘打ち、島外の出身者にも参加してもらえるような企画を練る。そのような折に現地上映会の話を受けたのである。

現地口之島上映会前にアチック写真集『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 2』を島民全戸に贈呈して頂いた。

アチック写真集を見て、懐かしさ、驚き、有り難さに鳥肌が立つ。自分が口之島で育った時代の風景が目の前に表れた。平成 22 年の口之島の情景からは、想像できないのである。驚いたことは、昭和 9 年に撮影した写真が鮮明に保存されていたことだけでなく、絶海の孤島の庶民生活を後世に残すために学術調査を行い、その遺志を引継ぎ、今日まで研究を継承されている研究者がおられたことである。

アチック写真集を全戸に配付しながら上映会への出席をお願いした。お年寄りも昭和 9 年代の写真があることに驚かれていた。昭和 9 年の調査団来島のことを記憶に留めている人はいなかったが、子ども 3 人の写真（目録番号：ア-10-35）を「これは私と〇〇と△△だよ。」と教えてくださったり、「この高倉は、カワのあんたの家と□□さんの家のだよ。あんたたちも覚えているでしょ。」と懐かしく語ってくれたりするのであった。

5. 「昭和 9 年薩南十島調査」現地上映会

2010 年 3 月 23 日（火）は、雨模様であったが 50 名を超える人が口之島小・中学校体育館に集ってくれた。

上映が始まる前から高齢者の方々は、既に配付された写真集のことを話し合ったり、体調を崩して一緒に参加できなかった人のことを語り合ったりして賑やかであった。上映が始まるとすぐに、「第一としま丸やっど。」「こげんなもんがあったたっがなあ（こんな、昔の物があったのだね）。こらよかとおみせてもろうど（これは、よい物を見せてもらえるよ）。」

「おうおう、にしんはまや（西之浜）。」「杉門があっど（あるよ）、出迎えたのかね。」

「学校で盆踊りをして見せたい、おんなんしのおどいをして見せたたっがな（女の人は、踊りを見せたのだね）。」

狂言の動画を見ては、

「こん人は、〇〇げえの人にちよっどね（この狂言をしている人は、〇〇さんの家の人に似ているよね）。」「昔は、本物の刀を腰に差して狂言していたもんな。」「迫力があっどなあ（迫力があるよね）。」

着物姿の写真（目録番号：ア-10-32・33・34）が映されると、

「△△さんげえのばあちゃんにちよらせんけ。（△△さんの家のばあちゃんに似ているよね）。」と、身を乗り出しながら眩くのである。

高倉の写真（目録番号：ア-10-23・24・25）では、

「こりゃあ、かわんくらだ（これは、カワ「湧き泉」の近くの高倉だ）。」「牛も写っている。」「〇〇げえと□□げえのくらやっど（〇〇家と□□家の倉だよな）。」

西之浜の刳船を見ると、

「にしんはまも、むかしゃあ、すなはまがあつて、すぶねも多かつたよなあ（西之浜は、昔は砂浜があつて丸木舟も多かつたよね）。」

中之島の伝統芸能の様子が映し出されると、踊りの種類の多さや口之島の盆踊りとの違い等を隣りの人と喋るのである。現在は、ほとんど引き継がれていないことを知ると「んだがしまもしいと引き継がないとだめやっどな（自分たちの島もしっかりと引き継いでいかないと無くなってしまふよ）。」との眩きに、島の伝統芸能は引き継いでもらいたいとの思いが伝わるのであった。

上映が始まって終わるまで身を乗り出し、それぞれが眩きながらワイワイと見入っていた。帰り際には、「良いものを見せてもらった。」と瞳を輝かせながら、皆が礼を述べるのであった。

6. 上映会後

上映会後の口之島小・中学校での活動や感想は以下のものである。

- ・児童生徒は、お年寄りに昔の生活や伝統芸能の聞き取りを行い、児童生徒会新聞に「昔の口之島コーナー」を掲載する。
- ・文化祭では、聞き取った話を劇化し、昔の人の心や生活の知恵を発表。お年寄りとの交流（ゲートボール、太鼓踊り、敬老会等）を積極的に行うようになった。
- ・昔の生活で使われていた物を学校に寄贈してもらって保存。郷土資料室づくりへ繋げるように努める。
- ・十島村歴史民俗資料館（中之島）見学会を全校児童生徒で実施する。
- ・口之島小学校学校創立80周年記念式典・記念文化祭（平成22年11月6日）で『アチック写真 vol. 2』を展示し、上映会に参加できなかった島外からの参加者にも国際常民文化研究機構のことや先人の研究者のことを紹介。
- ・今後、「十島ふるさと会」で上映してもらえると故郷への愛着や出身者の絆が深まるので関係者に依頼してもらいたい。
- ・余裕のある時期であれば研究者の先生方と懇親会を設けて情報交換もでき、さらに詳しく島の歴史を学ぶ機会になれたと思う。
- ・長生きしてよかった。わざわざ口之島まで来てくださった研究者の先生方に感謝します。

7. おわりに

昭和9年薩南十島調査の上映会の機会に出会えたことで、故郷の歴史、先祖の人々の思い・逞しい生命力に気づかせていただき、感謝の思いでいっぱいである。

上映会を終えて、母校の存続を強く願い、保護者・島民・出身者・行政関係者との連携を積極的に図るよう努めた。

現在（平成26〈2014〉年4月）、母校の児童生徒数が12人となり、島民との交流を図りながら未来へのあかりが見えてきたことに喜びを感じずにはいられない。Iターン者の呼び込み、山海留学生の受け入れ等で母校休校の危機を脱した感がある。一昨年より母校の体育祭・文化祭に合わせて「タモトユリ会」（口之島出身者会）の会員が40人ほど帰省して盛り上げている。これも全て昭和9年の「薩南十島調査」の研究者をはじめ、「常民」の生活文化にスポットを当てた研究を、現在の熱心な研究者の先生方が引き継ぎ、さらに現地上映会まで実施してくださったからに他ならない。

十島村全体の人口もここ数年増加傾向になってきた。私自身先達の思いを少しでも引き継いでいけるようにしたい。